

中越パルプ工業の竹紙事業について

～包装紙と新たな提案～

チーム「はまっこ」
穂苅拓也（リーダー）
増田雄太（デザイン）

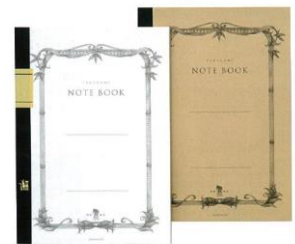
1. はじめに

私たちチーム「はまっこ」は、「中越パルプ工業」様が手がけている竹紙の新たな販売方法について研究し提案させて頂きました。

竹紙とは？

竹林は成長スピードがとても速い為、間伐を行わないと他の生態系を脅かし、土壌が弱くなり土砂崩れが起きる要因となります。そこで竹林管理を行い集荷した間伐材としての再利用方法として「竹紙」が登場しました。

中越パルプ工業様の竹紙は、加工し難い竹材を地道に研究し、国産竹100%の竹紙を作成した唯一の製紙メーカーです。



竹紙の課題

私たちのチームでは、夏季休暇中に「中越パルプ工業」様に訪問し、営業管理本部営業企画部部長の西村修様と同主任の片岡裕雅様からお話をお伺いしました。竹紙は、竹材の加工の難しさとコストの面が課題となっている点や、環境意識の高いユーザー層への訴求と認知拡大を目指していきたいこと、そして、事業として継続できるようにしたいとのお話などをお伺いしました。

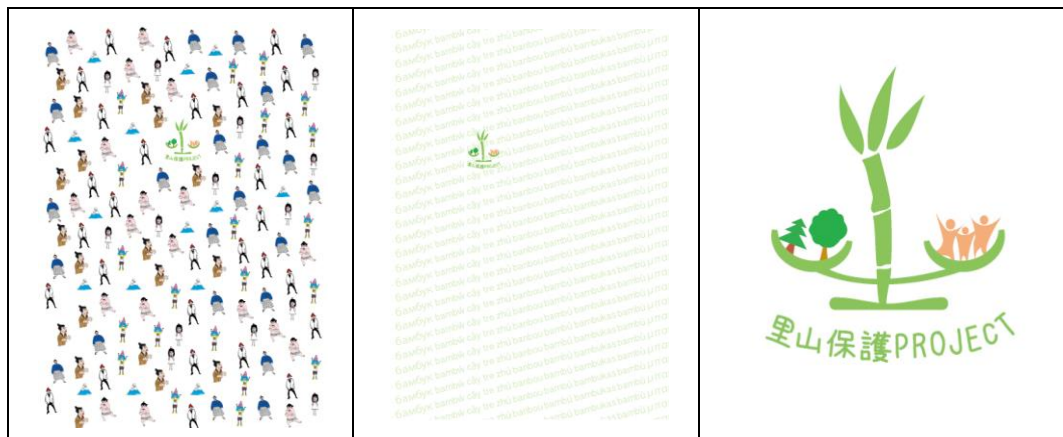
2. ヒアリングを通して～方向性の決定～

まずは、ヒアリングを通して出てきた問題のひとつ「日本の放置竹林の概況」について調べてみました。放置竹林が起こす被害などは、自分たちにはあまり馴染みのないことでしたが、西日本を中心に全国的に発生していることが分かりました。そこで実際に、放置竹林事業に関与しているNPO団体の方々にも現場での放置竹林問題のお話を伺いました。

NPO法人「京都発・竹・流域環境ネット」理事長の吉田博次様とお会いして、現場での課題をお伺いしました。放置竹林問題では、その土地によって竹そのものの特性が違う事や、他の用途への加工が難しい事、各団体間の情報共有も不十分で、取り組みはまだまだ進んでいないということを教えて頂きました。

製紙業界における「紙」という商品の場合、卸業者との取引ではどうしても「価格競争」に陥りやすい。そうしたなかで、いかに社会貢献をしているのかを取引先に理解してもらい、かつ継続的な取引ができる方法として、私たちが考えたのが「包装紙」という提案です。包装紙にすることで、最終商品として消費者に竹紙の価値や放置竹林問題が伝わりやすくなるのではと考えたからです。

デザイナーの増田君が考えたのが下記のデザイン案です。ひとつは、放置竹林という馴染みのない問題に対して、ポップな印象をもたせた包装紙を用いることで、竹林の問題に先ずは目を向けてもらおうという意図があります。もう一つは、竹を多言語に置き換えたデザインにすることで、日本以外の方にも竹林の問題を知ってもらおうという意図が入っています。ロゴマークには、里山と人間が竹を介して共生している様子が一目でわかるように作成しました。



3.提案

10月下旬、「中越パルプ工業」様にお伺いし、西村様と片岡様に、調査結果と包装紙としての新たな竹紙の利用方法について提案致しました。結果、「包装紙という新たな販路を見出そうとする点では、マーケットの動向や事業の継続性・利益という観点からも間違いではないと思われるが、社会貢献事業として『一人ひとりが社会に目を向け少しずつ変えていくことで世の中は良くなっていく』という思いを具現化した提案も欲しかった」とのお言葉を頂きました。また、「原料メーカーの商品という難しいものを扱う中で、問題の背景などをきちんと調べてもらった点では良かった」との評価も頂きました。

本プロジェクトに取り組んでみて、放置竹林問題というこれまで自分たちが知らなかった社会的な課題に対して、数多くの方々が熱い思いで取り組み、事業を進めておられる姿に触れることが出来たのは非常に有意義なことでした。こうした方々から、様々なことを教えて頂いたことで、自分自身の成長も実感することができました。

